政　　変

市長交代

平成十四年四月二十八日、村上市長選挙が執行された。若林久徳氏が現職五期目を目指し立候補したが、市政の閉塞感を唱え立候補した佐藤順氏が当選を果たした。私はこの時期の市長交代は歓迎出来なかった。この四月には、村上市岩船郡七市町村による広域合併を模索する任意の合併協議会が行政で立ち上がった。それをリードするのは村上市である。しかも、対等合併を目指す方向でまとまった七市町村の合併推進協議会には七人の首長が揃い、町村のベテラン首長も従えて村上市長はリーダーシップを発揮しなくてはならない。これは初めての市長には難しい試練になる。政治・行政の知識と経験豊富な政治家を束ね、まとめて行かなくては為らないのだ。しかし、これも選挙の結果であり仕方の無い事であると思うしか無かった。新市長に期待しつつ私は私の変わらぬ政治姿勢を貫き、是々非々で市政に臨む事を肝に命じた。

市長答弁

平成十四年六月には佐藤順市長が就任後、初めて臨む定例市議会を招集した。私はその議会で佐藤順市長に市長選挙の時に訴えていた公約などについて一般質問した。まだ初めての事だと思い、あまり深追いはしないようにしたつもりでした。問題になったのは姫路議員の一般質問の中での答弁であった。姫路議員が市長は対等合併と吸収合併のどちらを望むのか市長の考えを質した。それに対して市長は市民の望む合併後の市名を村上市にするには吸収合併しか無いと答えてしまった。この答弁で佐藤市長は、対等合併を進めながら新市名は村上市にと考えていた関係者に不信をかうと共に、町村の合併を進める関係者からは市長の胸の内は対等合併を破棄して吸収合併に有ると思われた。この発言からその後の合併作業は事ある毎に対立や溝を深める事になってしまった。真偽の程は定かで無いが私もこの時の質疑を聞いて市長が姫路議員と画策し、六町村に対し何か仕掛けたいのか、それとも喧嘩を売り合併を壊したいのかと思うほどであった。元々、この対等合併は前若林市長が六町村に対する敬意を示す事も考え提案した合併方式であった。それを心良く受けて町村の首長は村上市の主導する合併に賛同して来たものである。私から云わせれば政治家同士の信頼関係の中、この圏域の将来を考えまとまった合併であり、新市名は村上市の市長提案で決まる案件であった。第一、皆さん知っての通り、合併新市の現在の市名は村上市である。しかし、その時たった一度の村上市長としての失言が、その後の六町村との信頼関係を崩し混沌とし泥沼に填まり込み、抜け出る事が出来なくなった例であると私は思っている。

議員祝賀会の席で

六月定例会最終日に我々三期務めた議員の表彰祝賀会が割烹善蔵で行われた。佐藤順市長は席に着くなり私に耳打ちして来た。一部幹部職員の異動を実施すると云うのである。私は四月に全体の人事異動を行ったばかりであり、突然行う部分的人事の異動は少し待つべきと進言した。新市長と行政幹部職員の不協和音というのは、市長が職員全体の不信をかいかねない。先に述べたように市長に在っては市民の要望を見極め行政職員と緊密な中で事を進める必要があり、行政職員が持つ能力と知識、情報を引き出し、市長自身が持つ政策の形成と具体的な実施に向け職員を活用する責任がある。四百人から居る職員を日々、思い付きや好き嫌いで移動する事になれば大変な混乱が起こる。四十人の会社でも余程ワンマンな経営者でもなければ考えられない。しかし、彼は断行してしまった。後は、私の心配した事の連続で有った気がする。

村上市長への進言

私は若林久徳前市長を交代させる時期で無いと考えていたので、佐藤順氏と選挙戦は敵対したが、市民は村上市長に佐藤順氏を選んだ。村上市長に就任した以上は、お互い任期の間は是々非々の中で村上市政の進展に務める政治家である。好き嫌いで距離を措くので無く、必要に応じて互いの意見や助言はすべきと思っている。特に佐藤順氏は市長選挙の前から何度か相談も受けており私の思う事は伝えて来た。市長在任期間は四年間で有ったが、職員人事、三役公募人事、常の行政運営、市町村合併についてと、事ある毎に足を運び進言や提案を繰り返して来た。また、佐藤順市長からも私と伊藤正智氏に相談が有り、二人で良く市長室へ足を運んだ。周りからは二人は反市長派と云われる割に、良く三人で話しをしていたと思う。しかし、佐藤順氏は元来、人当たりは柔らかいが頑固な性格を持ち、少なくとも私の進言や忠告をまあまあと云いながら聴いては入るが、聞き入れた事は無いので無かろうか。少なくとも私の市町村合併への最後の進言を聞き入れていたなら、今とは違う新村上市が誕生していたので無いかと思い残念でならない。